

# 山と博物館

第33巻 第8号

1988年8月25日

大町山岳博物館

## ヒマラヤ展—講演会特集



頂上に立つ北側アタックメンバー

左より次仁多吉(中国)アン・ハクバ(ネパール) 撮影 山田 昇(日本)

### 三国友好登山の成果

谷口 現吉

今回のようにいくつかの特定された条件を背負ってエベレストに登頂することが、単なる登頂と較べてどれほど困難なものであるかは多言を要しまい。まして言語習慣を全く異なる異民族の登山者達が、国境の向う側の最終キャンプを進発して予め定めた特定の日に頂上に達したということは奇跡的大成功であった。まさに天佑神助と人はいうであらうが、与えられた最小限の機会を凡て生かし得るものこそまさに登山隊の力であり、そのかくされた余力の賜なのである。たとえその頂が既に多くの人達に踏まれたものであり、サミッターが皆既登頂経験者達であったとしても、この成果は決して減殺されるものではない。

登山とは常に未知への到達こそという信条をいざだくもの達にとつて、この企ては或いはあきたらぬものであるかも知れない。しかし今回とて既に熟知された凡ての経験知識の上に立つて綿密に新しく、登山界が今日まで経験しなかつた大きな新分野での行事を成し上げたのである。

登山本来のものではないが、エベレスト山頂からの衛星放送の大成功は錦上添花に錦を添えたものというべく、苦節八年に及んだ岩下チーフディレクター、中村チーフカメラマンのバイオニアワークには最高の讃辞を呈してなお余りあるものと思う。

成功裡に残る一つの危惧がある。それは今回参加した若い登山者達への老練心である。彼等は皆よく奮闘した。そして見事な成果の一翼を立派に担ってくれた。だが今回の登山隊のもつ異例ともいふべき本質を完全認識していただくだろうか。更には今回のごとき強大なチーム力と自らの力とを混同誤認することがなかったらどうか。歓迎行事の盛大さに自らを忘れることがなかったらどうか。どうか今回のこの貴重な体験を己が糧として更に更に精進を続けて素晴らしい登山者に成長していただきたいものである。

(日本山岳会名誉会員、山岳博物館顧問)

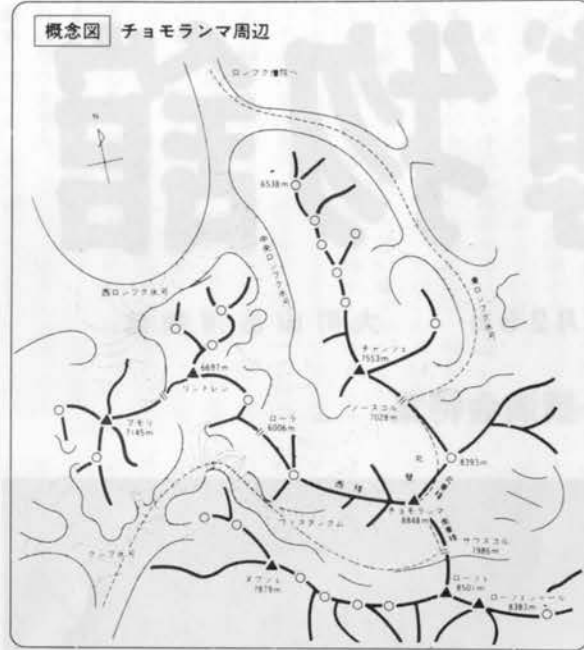
# チヨモランマ／サガルマタ交差縦走

## 重廣 恒夫

山岳博物館では去る7月16日より9月15日まで日本山岳協会、読売新聞社、日本テレビ放送網の支援を得て「ヒマラヤ展」―8000m峰と日本登山隊―チヨモランマ／サガルマタ三国友好登山隊―を開催しています。この特別展の一環として、チヨモランマ／サガルマタ交差縦走及びテレビ生中継の隊員として参加された重廣恒夫氏(日本隊北側登攀隊長)、岩下莞爾氏(テレビ隊長、総合ディレクター)の二氏をお招きし、7月23日に講演会を催した。これは重廣恒夫氏の講演の一部です。

今回の中国・日本・ネパール三国によるチヨモランマ／サガルマタ交差縦走、テレビ生中継には総勢283名が参加しました。登山隊員、テレビのチーム、新聞社の方、あるいは

はコックさんというような方々を含めて中国側に150名、ネパール側に約130名が生活しました。



登山隊のものが約30トン、テレビ隊の荷物もそれと同じ位あったと思います。それに中国で用意したものと約80トンになります。友好登山という第一に友好を目的とし、その成果というものには二番目と考えられがちです。しかし、今回は5月5日に頂上に登り交差縦走をし、さらにテレビの生中継を行うという命題が与えられ

ていました。

中国・日本・ネパールという三国は通常使っている言葉だとか食習慣などいろいろなことが違うわけです。今回は一見仲が悪いように見えるのですが、BC(ベースキャンプ)

以上の行動ではそれぞれの国の隊は同じテントで生活しています。同じものは食べないという方法をとりました。

食事に関しては日本人は非常に多種類の味を好むし、ネパール人は辛い味、中国人も辛

慣がまったく違うし、食事を作る過程・時間にも大きな差があります。今回はそういうところを無理に統制しないで、自分達で好きなように飲んだり食べたりする。そのかわりルート工作だとか荷上げに関しては三国が平等にそれを行うというようにしていただきました。その結果、最終的



南側B・Cへ向うヤクの荷上げ隊



三国の国旗掲揚(北側B・C)

な隊ですから隊員が多ければ登れるだろうと思われがちですが、登るためにはどんな人が必要かとまず考えたわけです。基本的にはチベット側から登りネパール側におりる、ネパール側から登りチベット側へおりるといのが交差縦走です。そして両側にサポーターがついて南から来た人は北のサポーターが手助けをし、北から来た人は南のサポーターが手助けをするというのが、基本的な行動計画なわけです。しかし反対側の援助を待っているようでは恐らく縦走という成功はないだろうと考え、基本的には頂上へ登った人が独力でサウスコルあるいは反対側のBCまでおりる体力あるいは技術が必要だと考えました。今回登



北側B・Cの全隊員集合

ばならないということ、同時に高山病の問題があります。人間の体というのは非常に便利といえますか適応能力がありまして、そういう高山病にかかった高所、かかるような高所でもそこに何度か登ったりおりたりをくり返すとか、何日か滞在することによって体が慣れてくるという馴化の過程があります。そうすると上に向かって行動できるわけです。ヒマラヤ登山の方法はいろいろですが、昔から行われてきた方法に極地法というのがあります。それは南極点または北極点に到達するときに

頂した山田昇さんは日本人では最多の8000m峰7座に登頂しています。経験も非常に深い人で、チヨモランマにも南側から2回登頂しており、ルートを知っているということにつけても最適だったろうと思います。我々の行くヒマラヤ登山というのは、国内の登山とちがいが非常に長い時間を必要とします。BCは5154mで、頂上が8848m。3700mに満たない標高差です。富士山のほうが標高差が大きいわけです。富士山は海拔0mから歩きはじめても2日か3日で頂上到達することができると思いますが、ヒマラヤではそれができない。その要因というのが途中に

キャンプと日程



最初に使われた手法で、まずルートワークというか、通りやすい道を探すことが必要になってきます。これは電車の線路をひくとか、道路を作ることになぞらえてもらえばわかりやすいのですが、ルートワークによってまず道を作るわけです。その線路がひかれると、その上を通って荷上げ隊が荷物をあげていきます。そしてル



北東稜の難所第2ステップを登る北側アタック隊

ートワークの終点がテントを張る場所になるわけです。その高度は日本を出発する前から決めてあるので、そこにルートワークをして物資を集積し、それが終わるとさらに上部ヘルートワークをし、荷上げをするわけです。それでC1とかC2とかC5だとか非常に多くのキャンプが必要となり、今回は8680mのC7まで用意して頂上へ向かったわけです。高度障害を克服しながら必要な物資を上げなければならぬために、それだけのテント数と必然的に時間が必要になってくるわけです。このルートワークとか荷上げの量は三國平等だったわけですが、今回はBCからの荷物の送り出しを登山隊長が行いました。そして6500mのABCからはマネージャーがその荷物を受けとり、さらにそこから上部へと送り出しました。ノースコルは指揮をとる最前線になるわけですが、そこで私が荷を受け取り、送り出すことをしたわけです。これは中に何が入っているか、どれくらい必要か、今



交差縦走成功 左より次仁多吉(中国) アン・ハクバ(ネパール) 山田昇(日本) 隊員

回計画を立てて実行したのは日本人ですから日本人にしかわからないということによって日本人が管理をしました。その結果が今回の成功につながったんだろうと考えています。

高い所というのは酸素がだんだん薄くなります。テレビをご覧になった方は、隊員の動作がゆっくりしている、えらくのろいなどという感じを受けられたと思いますが、5000mの高度になると酸素の量が平地の量になります。8000mになるとさらに少なくなっています。高度障害というのは皆さん体験がないかもしれませんが、二日酔とまったく同じ症状が出てくると考えてよいと思います。頭が痛い、吐気がする、タバコを吸ってもうまくいかない、あるいは考えがなかなかまとまらないというのが症状で、頂上へ行くまでにはそれを2回あるいは3回克服しなければなりません。とは言え障害を克服しても酸素の量は、きに減っているわけですから

すばやい行動はむずかしいのです。理屈では平地で1秒間に1呼吸なら5000mで2呼吸、8000mでは3呼吸すると必要な酸素はとどめられるのです。しかし登山という行為自体がマラソンの運動量に匹敵します。マラソンをしているとき呼吸数を倍にすることはできないわけで、登山も同様です。それで安全を期するために酸素ボンベを背中にかついで酸素を吸って少しでも息ぐるしさを逃れるわけですが、酸素が薄くなるとともに行動能力、思考能力というのは酸素量と同じように5000mでは半分に、8000mに5000mではさらに低下すると考えてさしつかえないと思います。

5月5日、頂上へ登ったテレビ隊の方が頂上へ着いてから、なかなか映像が出なかったわけですが、登った人達はカメラをセットするのに5分しかかからなかったと感じていました。しかし実際には20分を越える時間がかかっていました。

またテレビには出なかった早い縦走パーティーは12時前に頂上へ到達しており、その後サポート隊、テレビ隊が到着しました。そのため彼らが8200mのC6に帰ってきたのは夜中の1時、最後の人は3時40分ですからテレビに映らなかつた部分で苦しい場面がありました。これがヒマラヤ登山の難しさといえますか、頂上へ登れば成功という新聞の見出しにはなりませんが、頂上へ到達しながら帰ってこなかった人は多いわけです。その意味では頂上に登るまでの力が、おりてくる力がやはり必要だろうと思います。また技術的にも登ることはやさしいと感じますし、逆に下りというのはつまづいたり、ちよつとしたミスが事故につながることになります。そこ

で我々が隊員を選ぶときにも、体力を最重視しますし、技術というものも必要になってくるわけです。

私は幸いなことに8回ヒマラヤ遠征をすることができました。そのなかで8000m峰は4座登りましたが、7000mは3座ですが、行った数だけ登頂してありますので運がいいほうだろうと思います。今回は7000mで2日間滞在をし、そこで指揮をとるということで、残念ながら頂上に立つことはありませんでした。それは今回の登山は人数だったことと、三國が同じ目的のために協調して行動することが必要ということから、自分自身が登ろうとすれば、恐らく全体が成功するということがないだろうと、思いとどまったわけです。これも成功の一つの要因だったろうと思います。



講演会でサインに応じる重広(左)、岩下の両氏

経験の積み重ねが必要になってきます。山の状態は一刻一刻うつりかわっていて、適切な判断をするとき教科書で読んだこと、あるいは頭で考えることでは追いつかないわけで、瞬間的に出てくる判断力に頼らざるを得ません。それは長い間の経験で対応できるのだらうと思います。頂上に行ける、あるいは頂上にいつ登れるかという運をつかむためにも長い根気が必要です。つかんだ運をいつ発揮するかという勘も必要のような感じがします。

今回、文化を異にする三國の人達が集まり成功したということは、友好という二文字は重視しながら、お互いに規律と統制に従っていたのだという結果だろうと思いますし、これが今後のさらなる新しい三國あるいはアジアの友好につながる登山や他のスポーツへと波及していくのではないかと気がしました。

今回はテレビで長時間にわたって放送されましたので、恐らくヒマラヤ登山が皆さんに身近かに感じられたと思います。そして逆に我々もまったく知らない方々から長期間にわたって応援あるいは声援をいただきました。終りにご支援いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

(チヨモランマ/サガルマタ

日本隊北側登攀隊長)

注○使用写真は読売新聞社写真パルネルより

○図は中国・日本・ネパール一九八八年チヨモランマ/サガルマタ友好登山隊、隊員手帳より引用させていただきます。

山と博物館第33巻第8号

一九八八年八月二十五日発行

発行所 長野県大町市 TEL220-2111

印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号 長野四一三二九九三